

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ハイスクールD×D 死神の世界から来た者

【作者名】

中葉了

【あらすじ】

前世で5つの能力を貰いBLEACHの世界にいたはずが何故かハイスクールD×Dの世界にいた。

今回初めて投稿する事になりました。書くのも初めてで練習の作品になります。

小説の書き方も調べずに書いてしまったのでいずれ修正していきます。

かなりのご都合主義で皆さん引くほどだと思えます。

ですが私はそうだったものが好きで書いてしまいました。

どうか温かい目で見てください。

第001話

俺がこの世界に転生してもう16歳になり私立駒王学園の高校生になった。

最初の世界で死んだ後、神様に何の因果か違う世界に5つの能力を授かり転生させて貰える事になった。

その5つの能力を引つ提げてBLEACHの世界に行き色々なことがあった。

無敵と言っても過言ではない能力で、だから死んでもいないし、何故この世界に転生したのかは分からない。寝て起きたら赤ん坊になっていた。

産まれた時は思考より感情が優先されるのか、不安定な心のままだったからよく泣いた。あまりにも泣くもんだから両親に病院に運び込まれた事さえあった。

最初は非常に残念で嘆き悲しんだ。やっと平和になり数人の女性と付き合いハーレムを作って生活していたからだ。

でもハーレムを目的に転生したわけじゃない。何かと原作メンバーと知り合う機会があったし、気付いたら女性陣に外堀を埋められていた。

まあ、俺自身皆美人揃いで満更でもなかったけど。

4歳に成った時に尸魂界に行く為に、能力を使ったけど、行けなかった。

能力自体は使えたのに。

やがて数年もすれば諦められた。諦めるしかないと悟り、未練はあるけどこの世界で生きていこうと決心した。

偶に斬魄刀を具象化させて慰めてもらっていたけど。

まあ、そんなこんなでその後は能力の検証に移った。といっても霊

力やその他の能力などはそのまま引き継がれていた。

だから肉体面での向上に努めた。なにせ最初は斬魄刀もまとともに振りかぶれなかったからだ。それは当然のことです。生まれて4年で刀を振り回せるほうがおかしい。

俺の斬術はるろうに剣心という漫画を参考にし、神速の抜刀術を主体にしている。これは相性が良かったと判断したからだ。神速といてもいい速さで移動できる瞬歩に神速の抜刀術を組み合わせることで相乗効果が現れると信じ、技を研磨していった。まあ、いつてみればなんちゃって飛天御剣流だ。奥義の天翔龍閃だけは再現できなかった。

だから斬魄刀を短くしての訓練や戦闘はしなかった。前世の間合いや感覚と齟齬が出ると思ったからだ。

それに斬魄刀を解号するまでの刀の状態でしか抜刀術は使えない。それは神様から授かった5つの内1つの能力が斬魄刀のカスタマイズだったからだ。

なので戦闘では鬼道などを主体にした。

高校二年生の現在、成長期もそろそろ終わり、感覚と肉体がやっと前世の頃に戻った。それでも肉体や技など修行は今でも欠かさない。

これまで16年の間に色々なことがあった。そして今日黒髪ストリートロングの妖艶でスタイルが良い美女。名前は天野夕麻から駒王学園の校門前で話しかけられた。

「付き合ってください。兵藤一誠君」

俺の名前は兵藤零二。兵藤一誠は俺の双子の兄の名前だ。ここで家族構成をいうと両親二人に兄一人、そして俺の4人家族だ。両親はまあ、少々明るすぎるけど普通の人だが、でも兄は少々特殊だった。兄には大きな力が感じられる。兄自身は普通の一般人と変わらな

いのに。その謎の力を除きただ一つだけ一般人と違うのはド変態といったところか。

兄の友達にまあ、俺も一応友達ではあるけど、松田と元浜という同級生が居る。この二人と兄がつるんで女子の部室を覗いたりと色々して悪い意味で学園の超有名人である。

そんな兄の事と付き合いたいと言っている。それも兄の弟である俺と勘違いして。双子と言っているが、全然似ていない。それもそのはずで、最初に死んだ時から容姿は変わっていない、けど何故か身長は159cmと小柄で成長しない。でも、前世では180あったから今の身長の低さは新鮮さがある。それにDNAなど遺伝子情報は調べていない。俺は母のお腹から出てきたことを知っているからする必要も無い。

普通ならここであんな兄でも恋人が出来るかもしれないと思い「人違いだよ」と教える所だけど、今回は勘違いをしてもらおう。なにせこの子は人ではないからだ。

この世界に転生して4年が過ぎた頃、1つの能力を使い尸魂界に行くための門を開くため、場所を探していた時人外に遭遇した。

黒い翼を持つ墮天使だった。その後逃げ出し門を開いた先にあっただのは冥界だった。

その時に悟った。BLEACHの世界にはもう行けない、皆にも会えないって。

だからわかる。この女性は、いや、天野夕麻という名の墮天使だ。恐らく兄のあの謎の力をどうにかするために近づいてきたのだろっ。それでなければ、あの学園中の女性陣に白い目を向けられていないだろっし。

「いいよ。付き合おうか」

俺は天野夕麻に向かって返事をする。

その日は今週末デートの約束をしてすぐ別れた。

週末の日曜日デートに向かう途中、悪魔らしき気配のするロープを羽織ったチラシ配りに魔法陣の描かれたチラシを貰った。よくみるとその魔方陣は昔冥界で見た召還の物だった。一応そのチラシを胸ポケットに入れ待ち合わせ場所に向かう。俺の目的に役立つかもしれない。

デートは何事もなく普通に予定を消化していった。

人気のない夕暮れの公園に天野夕麻が俺を「こっちに来て」と連れ出す。公園に着いたその時ちょうど5時のチャイムがなる。

「今日は一緒に入れて楽しかった」

噴水の前でまで移動し嬉しそうな声で言う。

夕暮れをバックにその黒のストレートロングの髪と逆光で表情が見えない。そのくせ口だけは三日月の形をしている。さっきの嬉しそうな声はこれから起こる事を嬉しそうな声に乗せてのセリフだと思っただ。

「ねえ、初デートを記念して私の最後のわがままなお願いを聞いてくれる?」

やっと本題がきたか。この女に合わせてつまんねー茶番なデートもよつやく終わりが。

「何?お願いって何でも聞いてちょうよ」

天野夕麻は一層口の口角を上げる。

「じゃあ、死んでくれないかな」

言葉を口にした瞬間背中から黒い翼が生えてきた。やっぱり墮天使だったか。

翼を羽ばたきし空を舞い噴水の高さまで上昇する。黒いワンピースを穿いているから紫色のショーツが丸見えになっている。

こいつは恥じらいってものがないのか？もし本当の恋人なら今は人は居ないけど、こんな普段人が居そうな所で他の人に見せてほしくないけどな。まあ眼福ではあるけど。

そんなことを思っていると何か喋っていたが、気付かなかった。

「ごめん聞いてなかった」

「そうだよね。死んでと言われて普通は声も出ないよね」

何か勘違いしているけど訂正しなくてもいいか。面倒だし。

「今日は楽しかったわ。教科書どおりの幼稚なデートで。汚らわしい人間如きが最後に、こおくん良い女とデートできたんだから本望よね」

この女口元には冷笑なのか嘲笑なのか分からないけど浮かべながら、自分の身体に手を這わせ自分のボディラインを強調させる。

もう何をどう表現して良いか分からない。

外見は俺の好みだけど、性格がこれじゃあな。

もはや始末に終えないな。

天野夕麻は一本の光の槍を手に出現させている。

いよいよきたか…。

告白された日から家に帰った後、こっつなるだろうと思って毎日準備に勤しんだ。血を抜いてこの日の為に保存していた。

何故血を溜めたかと言うとそれは墮天使が人間の事等蟻程度にも見ていないことを4歳の時に知っていたからだ。

どこかで攻撃を仕掛けてくると思っていた。そのために仕組みを作る為血を抜いて溜めていた。

その溜めた血は鞆に仕込み天野夕麻が攻撃してきたら洋服にパイプを通してあたかも腹部から血が流れる様な仕組みにしている。

腕をふりかぶり勢いをつけ光の槍を俺目掛けて放り投げてきた。

光の矢が迫る中何とも遅く感じる攻撃にため息を吐きたい位だが、神様に貰った能力である写輪眼を使う必要もなくタイミングを合わせて反復横跳びを瞬歩を使い鞆の仕込みを作動させてもとの位置に戻り、お腹に穴が開いていないのがバレない様にすぐさま倒れる。

光の槍は後方に飛んで行ったのがわかる。

天野夕麻からは腹を光の槍が貫通した様に見えるだろう。血溜まりも出来ているし。

「悪く思わないでね。貴方達神器を宿らせた人間は私達にとっても危険因子だから。目覚める前から早めに始末させてもらったわ。恨むなら神を恨んでね」

言葉を残し飛んで行った。死んだかどうか確認する前に。バカで助かった。ここで力を使うわけには行かないからな。

奴の気配が消えるの確認し起き上がり今後の事を考える。

しかし、逢魔が刻とはよく言ったもんだな。

「とりあえずはこの土地を管轄している悪魔を呼び出すか。丁度魔方陣に血が吐いているし」

何故悪魔に連絡を取ろうとするかは、嘗ての仲間に出会ったためその悪魔と懇意になる為だ。俺の力を使い冥界に行くのは不法侵入になる。だからその悪魔に冥界まで案内を頼んでも連れて行ってくれないだろ

うから、今は言わない。だから他の事を頼む。

この土地を管轄している悪魔は知り合いではないけど、恐らく学園に居る悪魔のどっちかだと中りはつけていた。

魔方陣が描かれたチラシを広げ地面に置き手をつけ、眷属悪魔が呼ばれない為に隊長格並の霊力を込め悪魔を呼び出す。

魔方陣が光だし、その光越しに人のシルエットが見える。どうにか成功したか。

光が消え現れたのは、鮮やかな紅い髪をかきあげこちらを見ている。

その紅い髪には見覚えがあった。俺が通っている学園の二大お姉さまの一人リアス・グレモリー先輩だ。人間離れた美貌とスラリとした長身で起伏にとんだプロポーションを持つ。そしてグレモリーの名が示すように悪魔である。

因みに駒王学園を受験した理由は中学3年の時学園説明会の時校内を観察していた時悪魔の気配がしたからだ。俺の願いを聞いてくれるかもしれないと考えたからだ。悪魔は対価さえ払えば願いを聞いてくれることだし。

「いきなり私本人を強制転移させられたかと思ってどんな人間かと思えば、まさか普通の少年とはね」

俺はその言葉に呆れた。

「あのさ、普通の少年が悪魔本体を呼び出せるわけないでしょ。今日魔方陣の印刷されたチラシを配っているから貰って呼び出させて頂いたよ」

「そう。それもそうね。それで呼び出した用件は何？何でも叶えて上げる。それに見合った対価を頂ければね。所でさっきから気になっていただけけど、そのお腹の血はどうしたの？血を流していた

わりに元気そうなのだけねど」

シャツの裾を捲り。

「ご覧の通りなんでもない。それに今から呼び出した説明をするよ」

放課後校門前で堕天使に告白されたこと。デートの日まで血を溜めて作戦を練っていたこと。デート当日つまり今日の事を隠さず喋った。

ただ俺の力の事は喋らなかったけど只の人間とも思われていないようだ。それもそうか、人間が堕天使に敵うはずないしな。

「そう。ここ数日大変だったわね。それで呼び出した理由は？」

「この町の管轄の悪魔に堕天使が暗躍した事を知らせる為に貴方が、生徒会長を呼び出す為に少々手荒な召喚になってしまった」

「…あなた随分悪魔や堕天使の事を知っているようだけれど、本当に人間？それとこの町の裏の支配者は私よ」

半目で俺に視線を送ってくる。その目には不信感と恐らく何故か期待するような目で見てくる。

「まあ俺の正体や堕天使と悪魔を知っているかは想像に任せるよ。ただ敵対することは無いとだけ言っておく。それより堕天使が貴方の管轄する場所で暗躍している事実を伝えたから対価はチャラにして貰いたいな」

どのような対価になるか分からないから、交渉してみる。

片腕をお腹に回しもつ片腕の掌をあぐに乗せて考える仕草をする。

考えが纏まったのか顔を正面に向ける。

「いいわ。対価は無しにしてあげる。そのかわり私の下僕になりなさい」

「ふむ、下僕ね。なら呼び出した理由と下僕の件も一つで済むかな」

「何を言っているの？」

不思議そうに聞いてくる。呼び出した理由も言っていないしな。

「まず、呼び出した理由はある人物を庇護してもらいたい」

「ある人物？」

「そう。その人物は俺の兄だ。本当は兄を堕天使は殺そうとした。その理由は神器を持っているから」

話を通じたのか納得の顔をする。

「そういう事ね。貴方のお兄さんを守り尚且つ神器持ちだから下僕にもなるという事ね。」

「そう一石二鳥でしょ。神器持ちの下僕が居ればゲームも有利になるからね」

「…貴方ゲームの事まで知っているのね。どうせ聞いても教えてはくれないでしょうしね。いいわ、それで貴方は私の下僕になってくれるのかしら？堕天使を欺く事とこの私を呼び出す力があるのだから。」

「いや俺は貴方の下僕にはならないんだよ。これから見せる物と俺の力を他言しないと約束が出来るなら見て貰いたい物がある」

「物にもよるけど、まあ、いいでしょう他言しないと誓うわ」

「そう良かった。これ見て」

首に手をやり首に吊っているある物を見せる。

それを見た瞬間リアスの顔に驚愕の表情になり、戦闘体勢をとった。手には魔力を漲らせている。

「貴方っ、それを何処で手に入れたの！」

今にも殺さんばかりの目で此方の一挙手一投足を見逃すまいと見てくる。

「まあまあ、そう慌てなさんな。ちゃんとわけを話すから」

まだ疑いの籠った目で見てくるが、暫くすると手に出していた魔力は消してくれてた。

「これは昔譲り受けた物だよ。その時に許可は得ている。それを証明したいがまだ、俺の正体を隠したい為にもうちよっと待っててくれな
い？」

「今の所は貴方を信じましょう。但し貴方を監視させてもらうわ。野放しには出来ないから」

「やけにあっさり了承したと思ったら監視ね。…うん、それがお互いの妥協点だね。でも俺は悪魔の駒を持っているから眷属居るから」

「その話を聞いて少し安心したわ。貴方は力を持っている。それに悪魔の駒と人間でありながら眷属を持っている。もう訳が分からないわ。でも貴方の言葉が真実なら悪魔側の人間であることは間違いないから良しとしましょう。最後にさっき生徒会長と言っただけで学園の生徒？」

どうにか分かってもらえたようで、戦闘態勢も解かれている。一時はここで戦闘することも覚悟したからな。

「そう俺は2年の兵藤零一。これから宜しくリアス・グレモリー先輩。」

「兵藤零一か…、貴方の名前私達のクラスの女子が『かわいいけど少し眼が吊り上がっているから強がっているみたいでそのギャップが堪らない』って話していたのを聞いたことがあるわ。結構モテるそうじゃない。そして、私の事を知っているようだけど、簡単な自己紹介しましょう。私はリアス・グレモリー。この土地の裏の支配者よ。それではもう今日は遅いしこの辺にして、明日の放課後使いを出すわ。また会いましょう」

そう言っただけ魔法陣の中に消えていった。

久々に今日は色々なことがあった。ついにこの土地に居る悪魔と面識を持たれたけど、監視される事になった。まあでも兄を助けたと思えば安いものか。家族を守るのは当然のことだしな。それより問題は。

「服どしどしよ」

服の替えを持って来て来るのを忘れていた。

第002話

昨日あの状態で人に見つかったら、絶対両手が後ろに回っていただろう。

夜一が黒猫になれるように俺もママ柴になれるけど、血に染まったシャツや靴は置いてはいけない。シャツなんかは見つかれば、それこそ翌日のワイドショーで騒がれるだろう。

暗くなるまで公園の奥の方で隠れていた。

家に帰って血で染まった服を脱ぎビニール袋に入れゴミ箱に捨てた。

昨日の内に兄のイツセーに放課後空けて置くように言っておいた。その際少し嫌な顔をされた。まあ、イツセーから見たら弟の俺がモテているいるのが面白くないのだろう。BLEACHの世界ではハーレムを持っていた俺に、女性の扱いは手馴れたものである。かといってとつかえ引返しているわけでもなければ、蔑ろにしてもいい。

ただ俺の好みは大人な女性に興味である。中には教師何ていうのもあった。まあこの話は追々するとして。

そんなこんなで少々兄弟仲は悪くも無ければ特別良くも無い。男の兄弟仲はこんなもんだらう。

イツセーにはただ女性から話があるとだけ話した。まさか学園のアイドルであるリアス先輩からとは思っまい。会った時やその後の話を聞いた時のリアクションが今から楽しみである。

制服に袖を通し一階に下り、朝の挨拶と支度を終え朝食を食べる。

「イツセーはまだ起きないの？」

向かいに座る母にイツセーの事を聞いてみる。

「あの子昨日遅くまで起きていたみたいだからまだ寝ていると思う。もう少ししたら叩き起こすわよ」

「ふーん」

興味の無い風を装って返事をする。大方昨日女性から放課後呼ばれているとか、その先を妄想でもして興奮していたんだろう。

「あの子ももう少しレイを見習ってくれば良いのに。…女性関係以外で」

ため息を吐きながらしみじみと言う。あのだ変態さえ抑えられたらと云う事だろう。

「ぐふっ。ちよつと最後のは余計だよ」

味噌汁を飲んでいる時に嘔出してしまった。此方に飛び火したんじゃない。急いで朝食を食べる。

「」馳走様。俺は先に行ってくる」

「そう、いつてらっしゃい。気を付けるのよ」

「分かってる。行ってきます」

通学路を歩いていると女子生徒から声を掛けられ、それに応えながら学校に着きホームルームが始まるまで席について待っている。

チャイムが鳴る寸前にイッサーが走りこんできた。

前世では双子や同じ歳の兄弟は同じクラスなれなかったような気がするけど現在は同じクラスに在籍している。

今日の授業を終え放課後になる。放課後になるにつれてイツセーがそわそわしている姿に笑いを堪えるのに苦労した。

現在ではピークを向かえ頻りに顔を動かしている。

そんな中イツセーの元にこの学校一といわれるイケメン王子の木場祐斗がなにやら話していた。あいつも悪魔の気配がするから使用とやらはあいつのことだろう。

木場とイツセーが此方に向かって来る。木場は爽やかなニコニコ顔でイツセーは睨んで来た。

恐らく女性が呼んでいると聞いたから期待した分落胆が大きかったのだろう。

「今から僕についてきて。主が待っているし昨日話についてはいいでしょ?」

「おいレイ、男とは聴いてなかったぞ!どっついてくれるっ、今日の幸せの一日を!」

木場の話に割り込んで血の涙を流さんばかりのものはや慟哭と言っても良い位に言ってくる。

「落ち着け、イツセー。これから会いに行くんだよ。だから木場についていくぞ」

まだ望があるとわかり急に笑顔になる。喜怒哀楽の激しい奴め、鬱陶しいぞ。

「では行くじか」

木場を先頭に俺達兄弟が後ろに続く。

廊下に出て歩くと女子生徒の2種類の悲鳴が響く。

なんか俺と木場は良いらしいがイツセーが一緒だと許せないらしい。仕舞には「木場×兵藤」なんて声も聞こえ俺もどちらかに当てはめられたが、精神衛生上聞かなかった事にする。

木場の後に続きながら向かった先は校舎の裏手だ。

木々に囲まれた場所に現在は使われていない建物、旧校舎と呼ばれる場所に向かっている。

木場は旧校舎の中に入り二階の奥まで歩を進めた。

木場の足がとある教室の前で止まり目的地に着いたことを知らせる。

「ここ」で部長が待っているよ」

俺は教室のプレートを見て笑いを堪える。だって悪魔なのにオカルト研究部だってさ。ある意味良いギャグセンスなのかもしれない。

引き戸の前で木場がノックをする。

「部長連れてきました」

「そう、入ってもらってちょうだい」

教室の中からリアス先輩から声が聞こえる。

教室の中に入り目に飛び込んできたのは、室内に色々な悪魔の文字が書き込まれ、中央には巨大な魔方陣が描かれていた。

ソファーやデスクがあり一人の小柄な女の子が座っていた。

この女の子の気配を見て一発で分かった。黒歌の妹である。

あちらも俺をガン見してくる。姉と一緒に鼻が利くんだろう。俺の匂いと一緒に黒歌の匂いがするのを。

しかし、喋り掛けては来ず、羊羹を食べている。

正面のデスクの椅子に座ってリアス先輩が真剣な眼差しでこちら

を見てくる。

昨日俺は会っているから、イツセーを見ているのだろう。

その斜め後ろにニコニコした学園でリアス先輩と同じく有名人が居た。

名前は姫島朱乃先輩だ。黒のポニーテイルをしていつも笑顔をやさない、大和撫子を体現しているリアス先輩と双璧をなす二大お姉さまと呼ばれている。

イツセーは彼女達を見て鼻の下を伸ばしていた。こいつは先輩方だったら分かるけど、見た目が小学生の子にもエロい視線で見るとはもはやどうしようもないな。

「「こちら兵藤一誠君と、弟の兵藤零二君です」

木場が教室、いや部室に居る人達に紹介をした。

「ようこそオカルト部へ、私はリアス・グレモリー貴方達を歓迎するわ」

「あらあら、私、姫島朱乃と申します。初めまして、以後お見知りおきを」

リアス先輩が声を掛けた後姫島先輩が挨拶をしてくれた。その時俺と目が合った瞬間、ニコニコ顔は変わらなかったが、目が少しだけ揺れていた。

何か思うところでもあるのだろうか？

黒歌の妹、確か白音だったか？はぺコリと頭を下げるだけだった。

俺達兄弟は揃って頭を下げる。

「宜しくお願ひします。えーと、俺は何故呼ばれたか分からないですけど」

「貴方弟の零二から聞いてないの？」

リアス先輩は兄が何も知らずに来た事を驚き半目で俺を見てくる。

「俺からは何も。先輩が今からすると思ったから」

「ふう。分かったわ。とりあえず座りなさい」

リアス先輩はため息を一つして、俺達は空いているソファーに座る。

「お前先輩に向かって何タメ口きいてるんだよ。敬語で喋れよ」

イッセーが俺に向かって注意してくる。

俺はリアス先輩に聞いてみた。

「リアス先輩いいでしょ？」

「別にどちらでも構わないわ」

さしたる興味はないのかリアス先輩は簡単に許しを出した。

「粗茶です」

座っている俺達に姫島先輩がお茶を淹れてくれた。その際、俺に背中から密着する様に、そして耳元で喋った。

何故こんなに近いのかは分からない。この人がいつもこうなのかと思いいわりを見るとオカルト部の面々が驚いた表情をし、イッセーは羨ましそうに見ている。

「あの姫島先輩近いんだけど」

「うふふ、そんなこと無いですよ。それと朱乃、と下の名前で呼び下やう」

いや、明らかにおかしいいきなり下の名前で呼びづらいでしょ。まあ、とりあえず落ち着くためにお茶を飲む。

「美味しいです」

「ああ、零二君にこそそう言って貰えてとても嬉しいですよ」

近しい人に向ける笑顔と言えれば良いのか先ほどのニコニコ顔より親密さが増しているような気がする。

先輩に下の名前でもう呼ばれている。俺もお言葉に甘えて今後下の名前で呼ばう。

「俺もつまいです」

俺に向ける笑顔を見たイツセーが先輩に赚さずお礼を言う。しかし先ほどのニコニコ顔で。

何故俺だけ扱いに差があるのか。

朱乃さんを見て驚いているリアス先輩が話しかける。

「朱乃どうしたの？」

「いいえ部長。何でもありません」

「そう、…なら貴方も座ってちょうだい」

朱乃さんの態度に疑問に思ったリアス先輩が問うけど朱乃さんは答えなかった。

それにリアス先輩の隣の席が空いているの俺の隣に距離を詰めて

座って、こちらを見て微笑んでいる。

うん、もはや分からないな。周りに居る皆も分からないといった表情をしているけど、朱乃さんが何も言わない以上話が進まないからリアス先輩に話しかける。

「リアス先輩説明をお願い」

「…そ、そうね。かなり吃驚したけど先に進めましょう。まず最初に言っておくけど、」に居る貴方の弟である零二以外悪魔なの」

リアス先輩の悪魔発言に隣のイッセーを見るとポカンとした表情のまま固まっていた。

やがて回りを見て皆が嘘や冗談を言っている感じではないのに気付いただろう。

でも信じられないって顔をしている。

「証拠を見せましょう」

徐に立ち上がり背中から悪魔である翼を出した。イッセーは眼が飛び出さん勢いでその翼を見ている。

どうでもいいけど、その翼を出す時服が破れないのは何でだろう。そんな益体のないことを思っていると話は進み、悪魔と墮天使、そして天使陣営の三すくみの情勢とイッセーの中に眠る力神器の説明を終えている。

「そこで貴方に私の眷属になってもらおうと思って今日呼んだのよ」

「俺が呼ばれた理由は分かりました。でもレイが呼ばれたのには何か理由があるんですか？」

イツセーがこちらを怪訝な目で見て俺が呼ばれた理由を聞いている。まあ、それはそうか。自分には神器があり、眷属に誘われているけど、俺はこの場では誘われていないからな、無理もない。

「俺は昨日墮天使に襲われた所をリアス先輩に偶々助けられたから今日俺も一緒に呼ばれた」

「えっ！おいつ大丈夫か。あ、いや、ここに居るから無事か。ふう。…お前はいつも帰りが遅いから襲われていたなんて気付かなかった」

俺が嘘を吐いてイツセーの会話しているのを聞いたリアス先輩と朱乃さんは何を言っているんだこいつみたいだな目で見てくる。

リアス先輩なら分かるけど、朱乃さんにそんな目で見られる事に違和感を覚える。…もしかするとどこかで俺の力を見たのかもしれない。そうすると先ほどからの態度に納得いく。いやいくか？。力を知っているだけで好意を感じるような態度を取るだろうか。まずまず分からない。けど、朱乃さんは俺が力を持っていることを知っている事だけは分かった。

視線をイツセーに戻して。

「まあ、帰りが遅いのは認めるけど、俺が今日呼ばれた理由は昨日の墮天使がまだこの町に居るからなんだ。そうすると俺が生きていることが知れるわけだ。また襲いに来るかもしれない。そこでリアス先輩に庇護を頼んだわけ」

俺は言葉を合わせる様、リアス先輩にアイコンタクトをする。

「…そうなのよ。対価も貰ったから墮天使から零二を守っている。守り易い様に今日部室に呼んで入部させるために呼んだのよ」

寝耳に水とはこういう事か。入部など聞いていない。しかし、先ほ

どから墮天使の事で嘘を吐いた話し合わせてもらったし、イツセーを守る為にはリアス先輩の協力が必要だし、昨日俺を監視すると言っていたから恐らくその時にはもうこの話を考えていたのだろう。こちらも話を合わせるしかない。

「俺はリアス先輩の眷属になれないけど、守ってもらうには入部は丁度良いと思っただよ」

「ふ〜ん。墮天使がどの程度なのかわからないけど、悪魔である先輩に守ってもらうなんて羨ましいっ…」

実際は守ってもらうのはお前で、俺は監視されるだけだな。

「では、貴方達兄弟をオカルト研究部に入部させるわ。今から私の事は部長と呼ぶように。私はイツセーとレイと呼ばせてもらうわね」

『はい、リアス部長』

俺とイツセーの返事の声が重なる。

その後はイツセーに悪魔の駒の兵士分8個全てを消費した。兵士の駒全部を消費したもんだからすごい騒ぎになった。かなりの神器がイツセーに眠っていることが分かった。先ほど説明された秘めた力を解放するためリアス部長のアドバイス通りに神器を発現させた。その発現方法は小学生が出来ると思っていて練習して挫折しそんな力は無かったんだと、一步大人になる言っなれば通過儀礼みたいなものをこの歳でマジでやらかした。腹が据れるほど笑った。

発現した神器は有触れた『龍の手』であるらしい。所有者の力を一定時間倍にするという。

でもそれでは兵士の駒を全部消費しなくちゃ、悪魔に転生できないのはおかしい気がする。

今は分からないけど、いずれその時が来るのかもしれない。

イツセーに悪魔に成ると色々な得点があると説明している。それを聞いたイツセーは、「ハーレム王に俺はなるっ！」と握り拳を天井に突き上げている。

粗方説明が終わり俺とイツセー以外の部員の皆が一斉に悪魔の翼を展開した。

「では改めて紹介するわね。祐斗と小猫そして朱乃はイツセーと同じ私の下僕悪魔よ。朱乃は研究部の副部長でもあるわ。そして私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。爵位は公爵。よろしくね。イツセーそれとレイ」

意味有り気にこちらに笑みを向けると今日はこれで解散した。

第003話

オカルト研究部に入部した日から数日が立つ。俺は放課後部室に行き、下校時刻になるまで朱乃さんの淹れたお茶を飲んだり、他の部員と話をしたり、本を読んだりとしていた。

本来悪魔は夜の世界が本領を發揮する為、本当の悪魔としての活動は夜になってから始まる。しかし、俺は悪魔ではない為、悪魔稼業は当たり前ではあるけど、免除されていた。

下校時刻で俺だけ部室を去る。

イツセーなんかは夜中自転車で魔方陣のチラシ配りをしている。親にはリアス部長が暗示を掛けたらしい。

昨日の夜チラシ配りを終わり依頼者の元に魔方陣でジャンプできないと言うことを今日聞いた。なんでも魔力が悪魔の子供レベル以下だそうだ。仕方が無いから自転車で依頼者の元に行った。前代未聞だったらしい。

英語の授業でも英文を読んで驚かされていた。これも悪魔化の影響ということだ。

今日から依頼者の下に行けるようになり数日が立ったある日、部室でイツセーはリアス部長に何か強く言われている。

何でも教会の人間と仲良くなったとか。悪魔になったのに物好きになやつである。良くあんなやばい連中と付き合おうとするよ。

そんなことを思いながらリアス部長とイツセーを見ていたら、朱乃さんが「討伐の依頼が大公から届きました」と言っている。

「そっ、レイはどっしする、一緒に行くっ。」

リアス部長がこちらを見てからかい半分に聞いてくる。俺が力を隠したがっているのを知っているくせに。

「部長人間であるレイを危険な所に連れて行けないでしょ」

イツセーは心配しながらもどこか優越感とでも言えば良いのかそんな感情が見え隠れしながら言葉にする。

「そつだよ。俺が行っても足手まといになるだけだから遠慮させてもらつよ」

イツセーの言葉に便乗してこれから討伐の準備に入る部活の面々を後に残し今日は家に帰った。

討伐から帰ってきた疲れた様子 of イツセーに感想を聞いてみたら「色々すごかった、違う意味でも。レイは朱乃さんと仲が良いみたいだけど、気をつけるよ」と言って、すれ違い様俺の肩を叩いてくる。気をつけるって何だ？よく分からんが普段は大和撫子みたいなみたいな雰囲気 with 笑顔を絶やさない人だけど、戦闘となると性格が変わるのだろうか。

イツセーが悪魔稼業に慣れてきた頃、朝朝食を食べている時、青い顔で1階に下りてきた。話を聞くと依頼者が殺され教会側で仲良くなった子とエクソシストに遭遇して、戦闘になってそのシスターを置き去りにしてしまったらしい。こちらが慰める様に話してもあまり聞いていないみたいだった。そしてイツセーは学校を休んだ。

今日も部活でお茶を飲んで本を読んでいると学校を休んだイツセーが真剣な顔をして部室に入りリアス部長に今日の昼に遇った事を報告している。その報告の中に墮天使という言葉が出た。

その言葉に身体が反応しかかるが、何とか堪えリアス部長とイツセーの報告を聞く。

俺が反応しかかったのを部長が此方を見てくるが、報告が終わった

瞬間、リアス部長がイツセーの頬を平手打ちした。

「あのシスターの救出は認められない。何度言ったら分かってくれるの？」

「なら俺一人で行きます。俺を着属から外して下さい。俺個人として行きます」

「そんな事を聞きたいことじゃないのよ！どうしたら貴方は分かってくれるの？戦争の火種になりかねないし、なにより貴方は私の着属なのよ。行かせられるわけない」

だんだん口論がヒートアップしてきた。そこに朱乃さんが表情を険しいままリアス部長に近づき耳打ちする。

朱乃さんの報告を聞き終わったリアス部長の顔もそれ以上に険しくなっていた。

俺の方を一瞥した後、部室に居る全員を見渡すように言った。

「大事な用が出来たわ。私と朱乃はこれから少し外へ出るわね。それとレイちよっと来て」

俺に声を掛け部室の奥のほうに行く。

「まず貴方には謝らないといけないわね。ごめんなさい。墮天使からイツセーを守れなかったわ。それと朱乃報告で墮天使が活動が活発になってきたの。これから墮天使を始末してくるわ。契約不履行になってしまったから、いずれ何らかの形でお詫びするわ」

まあ、しょうがないか。日中ふらふらしたイツセーが悪いわけだけども、契約をまっとう出来なかったのも事実だ。何かしてくれると言うなら待っているか。

「わかったよ。そういうこととしておいて」

俺の言葉にいくらか安堵し話は終わった。

リアス部長はイツセーに駒の特性と神器を使う際の心構えみたいなことを言っつて、魔方阵から朱乃さんとどこかにジャンプした。

リアス部長達を見送っていると木場と小猫がイツセーと教会に乗り込む算段をしていた。

「ちょっと待て」

俺が3人に声を掛けると、教会に行く気満々でいた3人がはやる気持ちを抑えて聞いてきた。

「何だよ。これから教会に行くから早くしてくれ」

「そう急くな、今回は俺も行く」

「はぁー。お前が行ってどうするんだよ」

「別にどうもしないさ。俺は墮天使に借りを返せるチャンスだと思っただけだ」

「足手まといがいると嫌なんだけど、時間が無いからしょうがない。付いて来るなら安全な場所にいろ」

俺達兄弟の話の木場と小猫が黙って聞いていた。

しかし、えらく息巻いているな。敵地に安全な場所なんか無いのに。

「よし4人で救出作戦といきますか！」

イツセーの言葉で部室を出て教会に向かった。

外から教会の様子を伺う。空は暗く、街灯の明かりが道を照らす。傍から見ると不審者みたいだな。制服を着た4人が物陰から教会を見ていると。

木場が教会の凶面を何処からか出し墮天使が居るのは恐らく聖堂だと言っている。根拠は聖堂の地下に怪しげな儀式を行っているんだと。

地凶も見終わり作戦らしい作戦もなく教会に乗り込んだ。

教会の中は長椅子と明かりが内部を照らしている。人の気配もする。

正面のキリストの像の頭部が破壊されていた。これは墮ちた者の居場所を表しているのかもしれない。

教会内部を見渡していると突然拍手が起こる。先ほど気配がしていた奴である。

神父の格好した奴が喜怒哀楽をごちゃ混ぜにしたような言葉を吐いて来たけどあまりにうるさいからスルーした。まさに東から西に聞き流した。

この神父が前に言っていたエクソシストだろう。

懐から拳銃と剣の柄だけを取り出す。柄から光の刀身がでてきた。あの光は墮天使が使う光の槍に似ている。

イツセーが神器で殴りかかり、小猫が長いすを振り回し、木場が剣で切りかかる。

しかし、相手の神父は悉く交わし攻撃を仕掛けてくる。

「そろそろ本気を出そうか」

木場の台詞と共に相手の光の剣が黒に侵食されてきた。

「ためーも神器持ちかつ」

焦った様台詞を吐くが、顔が笑ったままだった。

剣が使えない今イツセーが殴りかかり、相手も銃を向けている。駒の特性を活かし兵士から戦車にプロモーションしたイツセーの身体が弾丸を弾き神器の宿っている左の拳で神父の顔面を殴った。しかし、柄だけの剣を拳と顔に挟み何割か衝撃を抑えた。

「よくも」の間はアーシアを殴ったくれたな」

一発殴ってスッキリしたのかまたは、優勢に戦闘を進められているから戦闘中に喋っている。

木場と小猫そしてイツセーは全て未熟と言わざるおえないな。BLEACHの世界に居た時は二番隊と隠密機動に所属していたから戦闘面やそれ以外でも未熟さが手に取るように分かる。

卑怯でも何でも3対1で無理なら、困んで後ろから不意打ちすれば良いものを。

もうただ見ているだけつても面倒になってきたな。

人間界には結構悪魔や墮天使それこそ力の強い人間もこの世界にいる。そういった奴らからバレないようにしてきた。俺が力を持っていることが分かると十中八九何かに巻き込まれる恐れがある。何たって意味も無く転生するわけも無いと思いたいけど、転生してくれた神様随分慌ててたからな。

この状況も只のミスって事もありえるな。

けど物語は進んでいる。再び墮天使と遭遇し、悪魔と一緒に部活している。

俺の立てた予定では俺の眷属と会ってからにしようとしたけど、今

日この戦闘に介入する事でそろそろ俺も表舞台に立つことにしよう。

戦闘を見続けながら覚悟を決める、会話しながらだからいまだに決着がついていない。

斬魄刀を手に出現させて腰に持っていく。

俺の斬魄刀は野太刀といわれる長さがあり刀身も肉厚で出来ている。分かりやすく似ている日本刀の例を出すと同田貫に近い感じだ。

抜刀術の構えを取り霊力を出さず瞬歩で戦闘中の神父目掛けて抜刀し白刃が煌く。

「ぐはっ!!」

『!!!』

神父を峰打ちして後方に吹き飛ばし斬心をする。

殺さない様に気絶しているのを確認して、刀を右手で上から下に一度振り被ってから鞘に収めた。

「あまりにもグズグズしているから俺が始末をした。さっさと先に行くよ」

「ちょっと待てっ。何でお前が刀何が持つてるんだよっ。つうか何処から出した!まだ俺達が戦闘中だっただろっ」

先に進むべく前を向いたら、肩を掴まれ身体を後ろに向けさせられた。

後ろを向くとイッサーが激怒しながらも俺が闘える事に動揺しているようだ。他の二人もイッサー同様に吃驚している。

「俺は闘えないとは今まで言っていないし、今は問答している場合じゃないでしょ。地下で儀式しているんじゃないの?さっきから下

でやばい感じがするんだけど」

「くそっ、わかった。後で聞かせてもらっつからなっ！」

いやだからといって別に説明もしないけどな。

俺の言葉に優先順位を思い出したのか祭壇の下にある地下の階段を下りる。

地下に明かりがありよく奥まで見える。

「」の道の奥だと思う。あのシスターの匂いがするから」

と一本道の奥の方を指差し、俺達は木場を先頭に進み、大きな扉が姿を現す。部屋の方からかなりの人数の気配がする。その中に天野夕麻の気配もする。

ここで俺が生きていることが判明するけど、今日方を付けるから問題ない。

しかし、入った瞬間バレるのも面白くないから、あの仮面を顔に被る。

いきなり俺が仮面を被り出したのだから、驚いていた。そりゃそうだろう。なんせ仮面がおかしいからな。

「気にするな。俺を襲った堕天使が居るから初っ端から分からないようにするためだ。これを被るのが俺のスタンスだ」

「お前もうちよっつましな仮面なかったのかよ。それに緊張感を持つよ」

イッセーと呆れていると扉についた。

木場とイッセーが扉を開け様とした時、扉のほうが勝手に開きだした。

「いらっしやい。悪魔の皆さん、それに……」

墮天使の天野夕麻の声が部屋の奥から言葉をかけてきた。仮面を被っている俺のことはスルーするらしい。それで良い。そう仕向けたからな。

部屋に入り見えたのは部屋中神父だらけだった。手に持っているのは先ほどの神父が持っていた光の刀身が出る柄を持っている。その柄は神父としての装備なのかな。

その奥に十字架に磔にされている金髪ロングの女の子が全裸でいた。

「アーシアアッー！」

あの子がアーシアさんか、イツセーの教会側の友達。イツセーの声に反応して返事を返している。

「今助けるぞ」

「感動の再開で残念だけど今儀式は終わるところよ」

「ああああ、いやああああああっつー！」

アーシアさんが苦しみもがき出した。イツセーが駆け寄ろうとしたら神父が邪魔をした。

「さっさと助けに行けっ！」

イツセーを蹴り飛ばし俺と木場と小猫で神父を倒し、道を作る。

しかし一歩及ばずアーシアさんの中から大きな光が飛び出し天野夕麻がその光を手に取った。

「これよ、これ！私が長年欲していた力。この神器さえあれば、私は寵愛をいただける！」

手に掴んだ緑色の光を自分の体内に押し付けた。

部屋中に光が反射し光がやんだ時、緑色の光をした墮天使がいた。

「ついに、ついに、この力、至高の力を手に入れたわ！これで私は至高の墮天使となる！」

一歩遅かったか。イツセーが必死で助けたがっていたから俺はサポートに徹していたが、こんな結果になるんなら俺が助けていればよかった。

イツセーはアーシアさんの元にたどり着き、手足の拘束具を解き彼女を抱きかかえる。

「助けに来るのが遅くなってごめん。でもすぐよくなるから」

「はい、イツセーさん」

「フッフ、無駄よ。神器を抜かれたものは死ぬしかないわ。だからもうすぐ死ぬの、その子」

冷笑を浮かべながら残酷なことを言う。まるでイツセーの反応を楽しんでいるかのようだ。

「っ…ならアーシアの神器を返せっ…！」

「折角この神器を得て私は至高の墮天使になったのよ。すぐ返すわけじゃないじゃない。それにこの神器を手に入れるために上を騙してまでこの計画を進めたのよ。そして、このことを知っている連中は口封じをしないとね」

「兵藤君、その子を庇いながらでは形勢が不利だ。一度上にながつてくれ！僕達が道を開ける！さあ、早く！」

木場が此方の戦況が不利と感じイッセーにアーシアをつれて避難するよう言ってくる。

その言葉を受けイッセーはアーシアさんをお姫様抱っこして、その場から駆け出した。

駆け出す際、神父が追いかけるが俺が切り伏せる。もうこんな奴らに手心を加える必要もないな。

少々狭い室内のため大きく振り被れないが、こんな雑魚一瞬で終わらせる。

一気に神父殲滅に動く。

「…貴方何者？悪魔でもないし、人間の気配がするけど。それよりその戦闘力意味が分からないわっ！」

イッセーが上に行き残っていたのはたったの3人で墮天使側は30人位残って、嗜虐的な笑みを浮かべていたのに、一瞬で、それこそ瞬きしたら神父全員が殺戮され、その現場を見え青い顔をして震えだした。

木場と小猫も此方を警戒しながら戦闘態勢を維持している。

俺は仮面を取り、天野夕麻を見ながらおどけた様に喋る。

「おいおい元恋人の顔を忘れたのかよ。悲しいね、まったく」

「っ！お前は私が殺したはずなのに何故生きているのよっ!!!」

「ちょっとは落ち着けよ。さっきまでの威勢の良さは何処にいったんだよ。あの時は死んだふりをしたんだよ。お前が俺に間違っって告

白した日にお前を見てすぐ墮天使だとわかった。お前の勘違いを利用し死んだように見せかける仕掛けを用意していたんだよ。」

「勘違いって何よっ！」

「お前は俺達兄弟を間違えたんだよ。俺は兵藤一誠ではなく兵藤零二だ。墮天使が神器持ちの人間を殺して回っているって知っていたから一芝居打たせてもらった訳。それとデートも態と詰まらない王道のデートプランを組んだんだよ。おわかり？」

「くそーおかしいと思ったのよ。アーシアがあいつをイツセーさんって呼んだ時に違和感があったのよ。それを見逃してさえないなかったら結果は違っていたかもしれない。それに後もうちょっとだったのにつ。私をバカにしてきた者達を見返すことが出来るのにつ！」

「まあ、俺が力を出した以上諦めるんだな。一応殺さないようにしてやるから」

俺はまた抜刀術の構えをする。その隙に逃げ様として黒い翼を広げ飛んでいる。

抜刀し靈力を圧縮してなんちゃって月牙天衝を放つ。

飛んでいった靈力を背中に受け錐搦み状で落ちていく。

落ちた所に向かい生死を確認する。

「死んでないか。弱い奴には手加減が難しいな」

そんな台詞を吐き天野夕麻の襟首を掴み引き摺る様にして木場と小猫のほうに向かう。

「止まれ。君は何者だ。君がそんなに力を持っているなんて知らさ

れていない」

木場が小猫を背中に庇い問いかけてきた。

「リアス部長には口止めしてあるからそれを守って言わなかっただけだよ。俺はずっと鍛えてたからこれ位普通だよ」

リアス部長と聞いて警戒心を解いたのか普通に接してきた。

「知らなかったから、吃驚したよ！だったら最初から言っといてくれよー」

「俺は訳があって力を隠してたんだよ。それに俺が力を持っていてもどつてもいいだろう」

「それはそうだけど」

「早く上に行きましょう」

木場は隠していた事に納得がいていない様子だけど小猫が話しかけてきてこの話は終わった。

「そうだな。上でも決着が付いている頃だろうしね」

『…』

木場と小猫がお互いの顔を見て首を傾げているけど、上に行ったイッセーの気配が先ほど増大した。恐らく何かあったのだろう。

俺達は上に向かう途中、魔方阵が出現しリアス部長と朱乃さんが笑顔で魔方阵から出てきた。

「部長墮天使の掃討終わったの？」

「ええ。それは終わったけど、貴方の引き摺っているのが今回の首謀者？それと貴方も戦いに参加したのね。力を隠そうとしていたのに。それに神器持ちとはね」

斬魄刀を神器と勘違いしている。他の面々も何も言わないって事は、リアス部長と一緒になのだろう。このまま勘違いさせたままにしておくか。うまく説明できないし、一々死神の力だと自分の手の内を曝す必要も無い。かといって別に信用しているわけではない。全てを警戒するくせみたいなものだ。

リアス部長の勘違いを指摘せず、そのまま会話を続ける。

「俺を殺そうとした墮天使がそうだったよ。まあ、予定より早く力を使う事になったけどね」

「さすが零二君ね。そんな墮天使なんか相手にもなりませんでしたわね」

リアス部長と話していると朱乃さんが俺の腕に自分の腕を絡めて胸を押し付けながら自分の顔を腕に擦り付けてくる。まるで自分の匂いを付ける猫のようだ。

「っーちよっとくすぐったいけど。それに今度は本当に当たっているから」

「ふふふ。当てているのですわ。嫌かしら？」

「嫌じゃないよ。逆にすごい嬉しいけど、今敵の本拠地だからね」

俺がそう言つとより一層身体を密着してまるで、大輪の花を咲かせ

た様な照れている様な笑顔を向けてくる。それにしてもかなり大きさと柔らかな胸だな。

「はいはい、まだ終わってないから早くイッセーの所に向かうわよ」

リアス部長が上に向かい俺達も上に向かった。朱乃さんは俺の腕を抱きしめたまま。

第004話

上に着くとアーシアさんを抱いたイツセーの姿があった。奥のほうに目を向けると俺が峰打ちにした神父が違つところに倒れていた。恐らく上に上がったところをイツセーが動くわして、戦闘になつたんだらう。よく見るとイツセーの籠手に紋章が浮かんでいた。力が増大したの何か理由があるのだらう。あの神父は口が悪いからイツセーの逆鱗に触れて神器が呼応したつてところか。

木場がイツセーの肩に手を置き話していた。

「ではレイ、墮天使をここに」

リアス部長が俺に墮天使を側に持つてくるよう指示を出す。

俺は墮天使をリアス部長の前に出す。

「朱乃水を」

「はい、部長」

空中に魔力で出来た水を出現させると気絶している天野夕麻に被せる。

「ゴホツゴホツ」と咳き込み目を覚ます。

「ごきげんよう墮天使レイナーレ」

「…その紅い髪…グレモリー一族の娘か」

「短い間でしょうけど、はじめまして。私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主よ。」

見下すリアス部長を睨めた後しばらくして嘲笑う。というかやつと天野夕麻の本名が分かった。いまさらだけど。

リアス部長達の会話を聞いていく。嘲笑を浮かべた天野夕麻改めレイナーレは、自分には仲間が居ると言いリアス先輩はそれぞれ違う3枚の黒い羽を見せ、まだ強がるレイナーレが戦争になるぞと脅すけど、俺が墮天使が暗躍していることを知らせていたから、朱乃さんと調査する為、お仲間聞きに言ったら自分達のやっている事を喋ってくれたそうだ。

リアス部長とレイナーレの話が進む中、今俺が気になるのは長椅子と一緒に座った朱乃さんが甲斐甲斐しく世話をしてくれる。

まず怪我がないかと言いなから身体を隅々まで調べたり、汗を掻いたままだと風邪を引くと、タオルで拭いてくれる。

なんか弟を可愛がる姉って感じだろうか。はたまた新婚夫婦のように今が楽しいって感じだろうか。判断がつかん。

今重要な話をしているのにイツセーがアーシアを心配そうに見ているのに偶にこちらをチラチラと羨ましそうに見てきている。

話がイツセーの話になり、宿っていた神器が赤龍帝の籠手だと分かった。

その神器の説明を聞きかなり強力な神器と思った。

リアス部長が裏で色々動いていてくれた事を知ったイツセーは部長に謝っている。

いよいよレイナーレの処分が決まる。どうやらリアス部長は自分のかわいい下僕に手を出したのが気に食わないと言い、右手に魔力を込めた。

その魔力を見たレイナーレが俺に視線を移す。

「お願い、私を助けて！」

俺に向かって涙を浮かべながら懇願してくる。俺はその姿を見て。

「リアス部長、俺にこの件を任せてほしい。その分対価を支払うから」

俺の発言にリアス部長達部活の面々は怪訝な顔をしている。

「お前何言ってるんだよっ！アーシアがこいつのせいで死に掛けているんだぞっ！」

俺の胸倉を掴み、殺さんばかりの血走った目でにらみ返してきた。

「俺は偽者とはいえ恋人にまでなった女をただ見殺しに出来なかっただけだ。もし恋人でなかったとしても、俺は出来るだけ女性は救いたい。でも、命乞いしなかったらそのままだったさ。それだけのことをしたと思うしな。それにちゃんとけじめをつけさせる。それでいいだろ」

「どうやってっ！アーシアは神器を抜かれたんだぞっ！」

「黙ってみていれば分かる」

胸倉を掴まれている手を解き、リアス部長に向き合う。

「どうにするリアス部長。俺と契約してくれるっ」

顎に手をあて考えているリアス部長に契約を願う。

「いいわ。但し、貴方のレイナーレにけじめをつけさせるのを見て

判断しましょう」

よし、ではレイナーレの元に向かう。さっきまで涙を流していたのに、今では殺されないと知って安堵した表情をしていた。

「レイナーレお前には2つの道がある。それを自分で選びな。まず1つ目ここでこのまま殺されるか。2つ目俺の言った条件を呑むか。さあどつする？」

俺がレイナーレに向かって二つの道を示す。といっても後者を取らざるを得ない状況だけだ。

「貴方の言う事ききます！だからさうさないでっ！」

俺の脚に縋り付いて懇願してくる。

朱乃さんが俺達に近づいてきて俺からレイナーレを引っぺがし、俺に抱きつき、レイナーレにすごいにらめ付けている。

まるで、母猫が自分の子猫に何かか近寄るのを警戒しているみたいだ。

レイナーレはその視線を受けかなりビビっている。

興奮している朱乃さんを落ち着かせるべく抱きしめ背中をポンポン撫でながらレイナーレとの会話を再開する。

「わかった。じゃあ条件はアーシアさんに神器を返し謝罪すること。次にもう悪いことはしないこと」

「その条件を呑むわ」

間髪居れずにレイナーレは条件を呑むと言っているけどまだ最後の条件が残っている。

「今言ったことは最低条件だ。…そして、最後に俺に一生付き従う
じゅ」

「いいわ。もう何でもいいからお願い」

俺の出した最後の条件を聞いてレイナーレは弱々しく返事をして
全ての条件を承諾した。

「よし、それじゃあ・・・」

「ちょっと待ってくださいっ！」

レイナーレに近寄ろうとしたら、朱乃さんが待ったをかけた。

「…えっと、何？」

「何、ではありませんよっ！何ですかその羨まし、じゃない付き従え
とはっ!？」

何か今まで人の人生を決めるから神妙な気分だったのに、浮気をし
た夫を問質されている気分とも言えはいいのか、いや付き合っても
居ないのに恋人面されている気分だ。

でもこんな美人の先輩なら大歓迎なんだけどな。

「朱乃さん話が進まないから最後まで見てからにしてね。え〜とそ
れでは、レイナーレには死んでもらっ」

言った瞬間、場が凍った。皆から、あっ、朱乃さん以外の全員が俺
を白い目で見てくる。

態とこうなる様に言ったけど、結構心に響くな。あの目を見ると。
俺はポケットからある物を取り出した。

「これは悪魔の駒で僧侶の駒だ。レイナーレにはいったん死んでもらって、その身体からアーシアの神器を取り出した後に、悪魔に転生してもらい、俺の眷属になってもらう」

今度はリアス部長以外が、驚きの表情で俺の手にある悪魔の駒を見ている。

朱乃さんは先ほどの勢いがいきなりなくなり、今にも泣きそうな悲しい眼をしている。

朱乃さんを慰めるべく再び抱きしめ背中を摩る。幾分和らいだが泣き笑いみたいな顔をしている。

数分立ち朱乃さんの顔にいつもの笑顔が戻る。

「もう大丈夫ですわ。ありがとうございます零二君」

抱きしめていた朱乃さんを開放し、レイナーレの方を見ると眉毛を寄せ難しい顔をしていた。

「墮天使である私が、悪魔に…」

「この方法しかさっきの条件は履行できない。諦めて悪魔になるか、永遠に眠るかどっちかを選べ」

「…わかったわ。いや、わかりました。貴方の眷属に加えてください」

諦めにも似た感情が見え隠れした返事をした。しかし、途中で敬語になり覚悟は決めたようだ。消極的にだけ。

「ではリアス部長レイナーレが死んだ後、神器を取り出しアーシアさんに返します」

「ええ、わかったわ。その後は此方ですから」

流石リアス部長。俺の言葉を聞いてすぐ分かっている。墮天使も悪魔も癒すその力ここで朽ちらせるのも勿体ないしな。

俺は刀を取り出し、抜いた刃の切っ先をレイナーレに向ける。

「お前は皆に迷惑をかけて、多くの罪を犯してきた。だからその罪を償いその一歩として死の痛みを知り、そしてお前が嫌っていた悪魔に転生して悔い改める」

「はい、わかりました」

レイナーレが青い顔のまま幾分神妙な表情で返事をして俺は心臓に斬魄刀を突き立てる。

レイナーレの身体から血が流れやがて目から生気が無くなり、身体から力が抜ける。

手に心臓を貫いた感触が残る。別に心臓なんて前世で幾らでもさしてきた。どうにも女性を切るのは慣れない。

でもレイナーレは俺の眷属として生かすと決めた以上こいつの罪は俺の罪でもある。一緒に償っていく。そう覚悟を決める。

死んで横たわるレイナーレの胸から、聖堂を明るく照らす緑色の光が胸から出てくる。

これがアーシアさんの神器だろう。アーシアさんから取り出した時の色にそっくりだ。

その光をリアス部長が受け取りアーシアさんの元に行きポケットからリアス部長の髪と同じ紅い僧侶の駒を出し悪魔転生の魔法を使い、駒が紅く光を発し神器と共にアーシアさんの胸に沈んでいく。

やがてアーシアさんは目を覚ましイツセーが駆け寄りアーシアさんを抱きしめ泣いて助けられなかった事を謝っている。

アーシアさんは何が起きているのか分からずにキョトンとしていたが自分が目覚めた事とイツセーのぬくもりを感じ逆にイツセーを慰めながら一緒に泣いている。

アーシアさんとイツセーが落ち着き何故アーシアさんが生き返ったのか、死んでから今までの事を話理解していく。

そこで俺がアーシアさんにレイナーレについて喋る。

「初めまして、アーシアさん。俺はイツセーの弟の零二だ。今説明にあった様に、アーシアさんの神器を取り出すためにレイナーレを殺して、神器を取り出し悪魔に転生させる」

俺が殺してと言った部分を聞き悲しそうに俯いた。

「アーシアさんがレイナーレを赦せなくても彼女に謝罪の機会を与えてはもらえないだろうか」

俺の言葉を聴きアーシアさんは考える事をせず。

「はい、レイナーレ様は私に酷いことをしました。でも罪は憎んでも人は憎まず、といますし、レイナーレ様がこれから罪を背負っていくと思いたいです」

「それじゃあレイナーレを悪魔に転生させよう」

「はい、その前にお祈りを。ああ、主よ。彼女の罪深い心をお許してください」

アーシアさんがレイナーレに向けて祈りだした。その直後「あうっ！」と途端に頭を押さえた。

「悪魔が神に祈ればダメージ位受けるわ」

リアス部長がさりりと立つ。

「うう、そうでした。私、悪魔に転生したんです。もう神様に顔向けできません」

目端に涙を溜め複雑そうな顔をしている。そんなアーシアさんに部長が後悔しているか聞いたけど、イツセーとこれから一緒にいられる方が幸せだという。

イツセーも満更でもないらしい。

これはイツセーに春が来たのかもしれない。

アーシアさんの赦しを得てレイナーレを悪魔に転生させる。

仰向けに倒れているレイナーレの元に行き僧侶の駒を掌に乗せ、俺以外の皆に零圧が感じるほどの霊力を出し転生の魔法を口にする。

「我、兵藤零二の名において命ずる。汝レイナーレよ。今再び我の下僕となるため、この地へ魂を帰還させ、悪魔と成れ。汝、我が僧侶として、新たな生を歓喜せよ！」

駒が眩しい透明な光を発しレイナーレの胸に沈んでいく。

やがてレイナーレが目を覚まし、辺りを見回し、俺を視線に捉え俺に片足を折り、跪く。

「我が君、私はこれから悪魔として生きて貴方と共に付き従うことを誓います」

レイナーレが復活し今まで横柄な態度とは180度違った態度で俺に忠誠を誓った。

「わかった。これから共にあることを許す。神妙な感じはここまで

にして、さっきも行ったと思っけどアーシアさんはお前の謝罪する機会をくれた。これからどうするか分かるね?」

俺はレイナーレに謝罪を促さなかった。それは俺の眷属になったから、俺の命令で謝罪したという形にすたくなかつたからだ。

レイナーレ自身がアーシアさんに向かってほしかつたからだ。

それにしてもイツセーと朱乃さん以外は静観する構えだ。恐らく主であるリアス先輩が何も言わないから木場と小猫も何も言わないのだろう。

問題はイツセーと朱乃さんだ。

イツセーはアーシアさんを殺した張本人でもあるレイナーレが憎いのだろう。

朱乃さんがレイナーレの「我が君」という俺を呼ぶ度に面白くなさそうな顔をしている。

「わかっております、我が君」

そう言ってアーシアさんのところに向かって行き、頭を下げた。

「アーシア、今までのことはごめんなさい。謝って済むものではないけどこれから心を入れ替えて生きていくわ。だから赦してとわ言わない。私のこれからを見ていて」

「はい、レイナーレ様。私はレイナーレ様を赦します。最初は嫌だったけどイツセーさんに会えたのもこんなことがあったからです」

アーシアさんの曇りの無い真摯な言葉にレイナーレが涙を流し。

「……ありがとう、アーシア」

震える声でそれだけを言って俺の元に戻ってくる。そんなレイナーレの頭をよくやったとばかりに撫でてやる。

これで俺の眷属も5人になった。早く他の仲間にも逢いたい。そうレイナーレを新たに仲間に加えて思った。最初の3人目までは訳があつて12年会っていない。でも仲間に出うための計画は成就されつつある。何せ悪魔の知り合いが出来たからな。

そんな事を考えながらレイナーレの頭を何時までも撫でていると、レイナーレは顔を赤くしながら嬉しそうに俺の手を受け入れていた。それを見た朱乃さんが俺の腕に自分の腕を絡めレイナーレから俺を遠ざけようとする。

朱乃さんとレイナーレの間で火花が散る幻覚が見えるくらい睨み合っている。

そんな最後に締まらない感じになったが、リアス部長がアーシアさんも納得しているからこの件はもういいと言い、契約については後日話すことになり今日は解散をした。

最後にレイナーレとアーシアさんは俺達の家に住む事になって、両親は娘2人が増えて大喜びをしていた。

レイナーレは家で母の手伝いをしながら俺をお世話をするといい、俺はまず「我が君」という呼び方をやめるように言ったのに帰るつもりは無いらしい。違和感の無い様に両親にも暗示をしていた。

アーシアさんは学園に通うことになり同じクラスになった。

イツセーの力が目覚め、そして俺は力を振るった。

これから物語が加速していく、そんな予感がした。

第001話

レイナーレとアーシアが家に来て一週間経つ。

家に来た当初アーシアは「これから一緒に住む事ですし、私にさん付けしなくていいですよ」と言われたので今では普通にアーシアと呼んでいる。

その際イツセーに軽く睨まれていた。

まったく、別に手を出したりしないのに。彼女のことは家族だと思っっている。あいつは何でもかんでも俺に對抗しようとする。まあ、双子だから対抗心かもしれないけど。

それにアーシアとイツセーは確実に惹かれあっている。それを引き裂こうとは思わない。だから早くくっつけばいいのに。最初は微笑ましいと思ってみていたけど、最近は鬱陶しくさえ感じるようになった。

レイナーレは俺の部屋に住み、学校に行く時間以外は何かと俺の世話をする。

例えばご飯を作り、自ら俺に食べさせたり、部屋に居れば横に座り身体を密着させ離れようとはしないし、一緒に風呂に入って体中を洗ってくれたり、一緒の布団で寝ようとしたりする。

俺も好きで彼女を側に置いているから満更でもなく、寧ろ甲斐甲斐しく俺の世話をしようとしている姿は、甘えているようでとてもかわいい。

この町の教会での態度は何か張り詰めていた様に今なら思う。でも俺と生活を共にして、余裕が出来たのだろうか。今の生活を気に入っているという。

俺の眷属にもなったから戦闘訓練をしている。戦闘力事態はたいした事無いけど、墮天使の光の槍は悪魔には有効だからそれを鍛えつつ、肉体も戦闘に耐えうる様鍛錬している。

アーシアはイツセーの隣の部屋にいる。でも俺は彼女の部屋には行かない。何もする気は無いけど、誤解されたくないしな。イツセーにもレイナーレにも。

イツセーは教会での出来事に何か思うことがあったのか身体を鍛えだした。

イツセーの持つ神器は赤龍帝の籠手といい二天龍と称された片割れが封印されている。聞いた所によると、この二天龍は常に戦い合っていたという。いずれも片方の神器を持つ者がイツセーの前に立ち塞がるのかもしれない。

けど俺は余力手を貸さないつもりだ。前はレイナーレに狙われた時は力に目覚めてなかったから俺が守ったけど、イツセーはもう守られる側から守る側に居なければならぬ。

龍は争いを呼び込むといわれている。それならいずれ強くなってもらわなければならない。アーシアを護れるくらいには。

今日もレイナーレの作った朝食を食べさせてもらってから登校した。

クラスではアーシアも一緒にかわいい女の子が転入してきたという話題はすぐ広まりそれと同時にイツセーと登校したのがバレて、俺達の家に住んでいることが判明し、学園中の男子から嫉妬の視線が飛んできてとてもうざったかった。

でも俺とではなくイツセーと一緒にいたため俺の方はすぐ収まった。常にイツセーといるから「あの兵頭兄ならいけるんじゃない」とかいわれてアーシアに突撃したのが全てが撃墜に終わり、イツセーにより厳しい視線が飛ぶ。

部室では今日も変わらず朱乃さんにお茶を淹れて貰い本を読みながら時間を潰した。と言いたいガリアス部長の様子が変だ。椅子に座ったまま窓の方を見てボーっととした物思いに耽っている。

物思いに耽り顔も美人で絵になっているけど、流石にいつもの調子

と違う。そこで隣に座っている朱乃さんに聞いても知っているけど教えてくれない。恐らくはリアス部長のプライベートに関わる事だろう。これ以上踏み込めないか。

下校時刻になり、俺だけ帰り、部活の連中は悪魔本来の仕事をするのだろう。

今日はレイナーレはアーシアの部屋で寝る事になっている。最初はある事件を起こしたレイナーレはアーシアに対して少し余所余所しく、これから一緒に生活していく上で支障が出ると思いい俺がアーシアに頼んで二日に一回一緒の部屋で寝るよう頼み今日も彼女の部屋で寝る。

最初こそレイナーレだけ気まずい様子だったけど今では仲良しの二人になった。まあ、アーシアの性格の良さも早く打ち解ける要因だろう。

部屋の電気を消し布団に入り一人寝の寂しさを紛らわせる様ささと寝ることにする。

すると紅い魔方陣が部屋の中央で光りだし、人のシルエットを浮かび上がらせる。

今まで力を隠し生活していたし、ある事情で部屋と言うか家全体を結界で防御していなかった。そのため簡単に魔方陣のジャンプを許してしまう。

この気配と魔方陣の紋様はリアス部長が俺の部屋にジャンプして来ることを示している。でも何故俺の部屋に？

光が収まりかなり切羽詰った焦った表情をして布団から上半身を起き上がらせている俺の元に向かってしな垂れかかり、俺の顔にリアス部長の吐息が掛かるくらいに近づけ言葉を発した。

「レイ、私を抱きなさい。今直ぐに」

「い、いや、ちょっと待ってよ！意味分からないよ！」

俺はリアス部長の肩に手を置き押しして距離を作る。

部活中リアス部長の様子が変だったから気にはなっていたけど、流石の俺もいきなり夜来て「抱きなさい」って言われて「はいわかりました」なんていかないでしょ。これが俺の好みの行きずりの女性ならそうしたかもしれないけど、でもこれは突拍子も無さ過ぎる。

「貴方なら経験豊富でしょ。それにレイナーレとの契約の件をこれで無しにしてあげる。丁度布団が敷かれていることだし、さつさと済ませましょ」

リアス部長がそう言い、制服を脱ぎだした。スカートを脱ぎブラウスを脱ぎ黒の下着姿になって、再度俺にしな垂れかかって来る。

制服を脱ぎ下着姿になったリアス部長は女性として完成している見事なプロポーションをもっている。胸は手に収まらないくらい大きく腰はくびれおしりも柔らかかそうだった。

リアス部長が普段の様子でなら、その求めに応じたかもしれない。しかし、俺は女性がその気になっていないのにこんな状態であるなんてごめん。俺の中で女性は大切にするものだと思っている。これでは双方が傷付くだけだ。急速に俺の心が冷えてきた。

そんな事を思いながらリアス部長を見ているとブラジャーのホックに手をかけ開放された胸がたゆんたゆんと揺れて躍り出てきて俺の手を取り自分の左の胸に押し付けてきた。本来なら嬉しいシチュエーションでも俺達の間になんかそういう雰囲気はゼロで何ていえないんだらう、まるでこれから行われることが作業の一環とでも言えればいいのか、逆にリアス部長にここまでさせる何かがあったのだから。

部活ではリアス部長のプライベートだからと遠慮して直接聞かなかったけど、流石に心配になりリアス部長に話しかける。

「部長がどれだけ悩み今の行動に出たのか俺には想像できないけど、相談にも乗るし力にもなるから」

リアス部長の身体にシーツを掛けて諭すように話しかける。最初は「私には時間が無い」とか「既成事実が」と口に出してたけど、抱きしめて背中や頭を撫でたりして落ち着かせる。これは前世でかなりの効果を挙げた女性の扱い方だ。やはり効果は出るのだろう。前世との違いは背が高く優しく包み込む感じで落ち着かせたのが、今はリアス部長にやや大き目のヌイグルミに抱き着いている様な感じの構図になっている。

大分落ち着いてきたリアス部長に話を聞くため、抱きしめていた腕を解こうとした瞬間部屋の床が再び光りだした。

魔方阵の上に立ち浮かび上がった人のシルエットの方を見る。

銀髪のメイド服を着た美人が出てきて俺とリアス部長が抱きついている姿を見る。

懐かしい魔方阵の紋様だと思った。まさかここで会うとは思わなかった。

俺が会いたいと一番に思っていた人物がまさか俺の部屋で会うとは思わなかった。

こっちでは10年経つけどあちらでは何年経ったかなんて分からなかったから。だから悪魔に接触し冥界まで案内を頼もうとした位だ。

懐かしさに思いを馳せリアス部長と抱き合っている事を忘れてまで居ると。

「そんな事をしても破談には出来ませんよ？」

呆れた口調で淡々と言う。それを聞いた部長はより一層俺に抱きついてくる。

「最初は処女をこの子に捧げればお父様もお兄様も私の意見なんて

聞いてはくれないでしょう?」

ようやく落ち着いて話ができる状態になったリアス部長が激昂して食って掛かる。

二人の会話を聞きリアス部長のここ最近の不安定な感じがやっとわかった。破談ということは婚約か何かをしたのだろう。本人の了承を得ずに。

まあ、グレモリー公爵家の時期当主だし、それでなくても純血の悪魔の数が大戦と新旧魔王同士の内戦で激減し断絶した家もあると聞いた。

そこで跡取りとして婿でも取ろうとしたのだろう。当たらずとも遠からずといったところか。

銀髪の女性は俺を一瞥する。

「このような下賤な輩に……っ!!!」

「……どうしたの、グレイフィア?」

いきなり言葉を発しなくなり、はっとした表情を浮かべるグレイフィアにリアス部長が怪訝な声で話しかけるも聞こえていないようだった。

グレイフィアの視線は俺だけしか捕らえていないようだ。

この部屋にジャンプして来た時から薄々思っていたけど、もしかして俺だと気付いていなかったのか。俺はすぐ見るまでもなく気配でグレイフィアだと分かったのに。

「下賤か……俺は只再び再会する事だけを願って居たというのに、かなり寂しいな」

流石の俺もネガティブな感情になり言葉をつぶやく。

石の様に固まっていたグレイフィアが再起動したと思ったら、俺と

リアス部長を引き離しに掛かり猪のように突進して俺に抱きついてきてその豊満な胸に俺の顔を押し付けてきた。もう離さないとばかりに。

「痛っ！ちょっとグレ」

「主様っっっっ!!!」

リアス部長が文句を言いきる前にやっと俺だとわかったグレイフィアが言葉をかぶせる。

「ぐすっ…。御免なさい、主様。すぐに主様だと気付かずに。でも主様も悪いんですからね。あれから数百年が経ちます。まさかあの時、そんなに年数が経つとは思ってもありませんでした」

くすくすんと泣きながら俺に痛いぐらい抱き着きながら謝罪するグレイフィア。まさかあのグレイフィアが泣くとは思わず吃驚する。

「それにあの可愛らしかった主様も今でもあの当時の可愛らしいままで。よく私の膝の上に乗せて居たものです。」

俺は当時を思い出しているグレイフィアの頭を撫でる。

可愛いはちょっと言いすぎである。「こちらでは12年経ち俺も高校生だ。」

でもグレイフィアの印象からしたらあの当時のままで止まっっているのだから。

「ちょっと貴方達！何この状況っ！グレイフィアは私を追ってきたんじゃないのっ？それが何故レイに泣いて縋っているの？それに主様って何、知り合いだったのっ？」

そんな俺達を今度はリアス部長が石の様に固まっていたが、グレイフィアが段々と落ち着いてきた頃俺達に矢継ぎ早に事情を聞いてきた。

「話すと長くなるから、短く言えばグレイフィアは俺の女王の駒を与えた人物で俺の最も信頼する眷属だ」

「えっ!?何を言っているのレイ?グレイフィアは私のお兄様の女王よっ」

「は?」

リアス部長にグレイフィアが俺の女王だという話をしたら、リアス部長の兄の女王だという。意味が分からん。確かに俺は一番最初にグレイフィアに悪魔の駒の女王を私最初の眷属に成ったはずだ。俺の目の前でだから間違いないはず。

かなりのショックを受けグレイフィアに聞いた。

「どっしりして、グレイフィア?俺の眷属じゃなくなったって事。それならそうと言ってくれればいいのに。俺はそういう事はグレイフィアの口から聞きたかったな」

「誤解しないでくださいっ!主様っ!私は見も心も主様だけのものです。それだけは疑わなくてください。それにこれには訳があるので」

今まで俺を抱きしめ俺が疑うような事を言うものだから必死で俺が誤解しないように言ってくる。

グレイフィアの話によると、旧魔王派の一派に居た最強の力を持

つグレイフィアが新魔王派の眷属に居ることによって双方の安定を目指す政策の一環だったらしい。

ただ相手の誤算はグレイフィアが俺の眷属になってしまっていた事だ。

しかし、相手も女王がおらず、王である俺も冥界に居なかった、グレイフィアも条件を付けその話を了承した。

「条件？」

「はい、以前主様が『俺は女に尽くすより尽くされたい』と仰っていたので、現魔王のル視ファー様の提案に乗り公爵家のメイドになる事を条件に、何時の日か主様に相応しい女性になりたかったのです」

「・・・そっか」

こんな綺麗で魅力的な女性に言われるのはとても嬉しいし反面、一緒にいた年月が短く離れていた年月が長かった。俺が嘗て女性の好みについてグレイフィアに聞かれたことをまさか実践するために魔王の眷属、いつてみれば食客みたいな感じであったとは。

二人の雰囲気は過去から現在に時間が奔流する感覚に陥り、無言の時間が続く。

けど決して嫌な空気ではない。長年連れ添った夫婦みたいにお互いの眼を見れば分かるように。

「私の事忘れてない？」

ふいに聞こえてたりアス部長の声に俺達の意識が浮上する。

「い、いや、そんなこと無いよ、っつ」

少々焦りながら言い訳めいたことを言い取り繕う。

俺は抱きしめて見詰め合っていた目線をリアス部長に向け疑いの眼差しを受け、グレイフィアを俺の腕の中から開放する。

「主様感動の再会はこれ位にしてまた後日お話を致しましょう。さて、お嬢様私の主様に目を付けた事は素晴らしいと言いたいところですが、今私はグレモリー家の遣いで来ております」

咳払いを一つして再びグレモリー家の者として表情を作りリアス部長に問いただすが未だに眼と顔が赤いグレイフィア。

「わかっているわよ。私の根城へ行きましょう。それではレイ、また貴方に聞きたい事が増えたけど、今日のお礼は何時かするわ」

「お礼なんてしてもらうほどなにもしてないよ。それでもいいなら明日の部活の時間部室で膝枕をしてもらおうかな」

膝枕と言った瞬間グレイフィアの強い視線が俺を見抜いたが、先ほどグレモリー家として公人になったばかりで、すぐ戻れない為何も言ってこない。眼ですごく言い言っているが。

「それくらいなら何時でもしてあげてもいいわよ。私の話を聞いてもらいたいし、さっきは諭してもらって嬉しかったし。また明日部室で会いましょう」

部長は別れを告げ、魔方陣と共に消えていった。

「それでは主様。まさかここで邂逅するとは思ってもありませんでしたが、今日はこのくらいに。また会いに参ります」

「わかった。最後にもう二人どうしている？」

魔法陣の放つ光の中に居るグレイフィアにそう問いかける。

「騎士は相変わらず。兵士は修行に行くと言いつい何処かに行ったまま連絡がありません」

「そうか。それではまたな」

「はい」

そう言い光の中に消えていった。

第002話

翌日の放課後イツセー達より早く部室に向かう。それは勿論リアス部長の膝枕が楽しみだからだ。うきうきした気分で行校舎にある部室の扉の前に着きノックをして入った。

「こんにちはレイ。昨日は色々済まなかったわね」

中には部長一人だけで他の部員はまだ来ていなかった。

「いいえ、誰しも色々なものを抱えているものだから。それにリアス部長に頼られたと思ったら嬉しかった」

「そう、それなら良かったわ。それじゃあ、昨日の約束のお礼と話を済ませましょうか」

「はい」

リアス部長は普段座っているデスクにある椅子から立ち上がり長椅子が置いてあるところまで来て座る。

「おいで、レイ」

自分の腿を軽く数回叩いてこちらに来るよう促す。

俺は鞆を椅子の横に置き椅子に横になりリアス部長の腿の上に頭を置いて部長を見上げる。

「ふふ。貴方の髪の毛が少しくすぐったいわ。まるで大きな猫ちゃんみたい」

そう言いながら、俺の髪の毛を撫でるように梳く。俺はその手付きに安心感と気持ち良さを感じ目を瞑る。

数分間そのままお互い無言の時間が流れる。この空気を大事にした
い思いがあるけどリアス部長が中々話を切り出さないから昨日の事
を俺から話を促す。

「リアス部長」

「何？」

俺がリアス部長に話しかけると梳いていた手を止める。聞かれる
とわかっていたのだろう、そんなニュアンスが含まれた返答だった。

「リアス部長に婚約の話があるって言ってたけど嫌なんですよ？」

「ええ、そうね。決められたものは嫌なのよ」

「なら俺がなんとするよ」

「……………ふふ。そうね、その時は貴方を頼りましょうか」

少し間があって帰ってきた言葉に力があまり感じられなかった。
リアス部長自身全然婚約破棄を諦めていないけど、どうしたらいいか
分からない、それに俺にもあまり期待とつかさういったものを感じ
なかった。

まあそれは仕方ない。具体的な方法を示さなかったからだ。

最悪力づくでも遂げて見せる。映画やドラマなどで使い古された
方法だけだな。

蛇足になるけど現実でやったら誘拐とかで捕まるけどな。

再び手を動かした部長に合わせて俺も目を瞑り気持ち良さにと
うとして眠ってしまった。

目が覚めて外からイッセー達の声が聞こえてくる。目だけで回り
を見渡し時計を見て眠ってから早くも無く遅くも無い時間が経過し
ていた。

部室には相変わらず俺の髪の毛を梳いているリアス部長と、朱乃さ
ん、小猫、そしてグレイフィアが居た。

ただ小猫とリアス部長以外変な雰囲気になっていた。変って言う
のは別にいやらしい事ではなく不穏な感じになっていた。

朱乃さんはリアス部長に「私に代わりなさい」と普段の部長と副部
長或いは主と下僕といった感じではなく、親友同士の対等の感じで
喋っているけど、リアス部長は柳に風とばかりに「昨日約束したから
私がしている。」とばかりに譲らない。

グレイフィアはまたメイド服を着ているから公人として来ている
のだろうけど、リアス部長を見る視線が凍てついていて、手をお腹の
下のほうで組んでいるけど、かなり力が入っているようだ。

昨日のグレイフィアの態度からすると朱乃さんと一緒に主である
俺に自分が膝枕をしたいけど公私混同は出来ない和我慢しているの
だろう。少々不器用なやつである。

「あら、起きたのね、レイ。ふふふ、私の膝枕は気に入ったようね。
気持ち良さそうに眠っていたわよ」

また寝たフリをしようとしたけど、腿から伝わってきた感覚で、俺
が起きた事を察したリアス部長が俺に話しかけてきた。

こんな空気で俺に話しかけてほしくなかったのに。

「う、うん。」

雰囲気は飲まれ返事しか出来なかった。何時の場所でも女性陣の

これには弱かった。

部員が集まってきたから起き上がるつとすると。

「まだそのままでもいいのよ」

と言いながら起き上がるつとした頭をその豊満な胸で抱え込みまた自分の腿に俺の頭を乗せる。

「リアスッ！いい加減にしてっ！早く私に変わってっ！授業が終わって私にグレイフィア様を迎えに行かせておかしいと思ったのよ。普段なら自分で迎えに行くのに」

とつとつ痺れを切らした朱乃さんが俺を奪い

に来て俺の頭を部長より大きい爆乳に押し付ける。

「朱乃、悪魔は必ず契約を実行する。昨日『部活の時間膝枕する』って契約をしたのよ。それを反故にしるって言うの？それに、貴方が居たままでは必ずこうなると思ったから迎えを頼んだのよ」

「そんな悪魔の契約って義務感から来る事なら私に変更しなさいよっ」

「私は義務感だけで誰でも膝枕をしてあげるほど安くはないわよ。この子に言われたからしてあげたの」

何か段々変な方向に話が進みだした。このままでは実力行使に出そうな朱乃さんとそれを阻止するリアス部長で喧嘩になりそうだ。

「先輩方落ち着いて。リアス部長にはこのまま膝枕をしてもらいたい」

「そんなんっ!」

俺の言葉を受け朱乃さんが絶句する。その後すぐ手に雷の魔力をまとわせ始めた。

俺は言葉を最後まで言っていないのに朱乃さんは話を途中まで聞いただけでまずいことになっている。

「ちょ、ちょっと。まだ話は終わってないよっ! 朱乃さんには後日して貰いたいっ!」

「絶対ですよ。零二君」

発射体勢になっていた朱乃さんに口早に言う。その言葉を聴き渋々納得つといた様な顔で魔力を散らす。

「私が『雷の巫女』なんかよりずっと差し上げます」

話が終わり掛けた時とうとう我慢できなくなったグレイフィアが爆弾を投下する。

「ちょっと。何最後にぐちゃぐちゃにしてるのっ!」

「しかし主様。そんな小娘なんかより私の方が何万倍も主様を私の膝で癒して差し上げられます」

「小娘ですって、それに零二君に主様って何ですかっ?」

また話が振り出しに戻った、いや今度はいきなりグレイフィアが割って入っていったからさっきより酷くなってきた。俺が二人にフオローしようとした時。

「いい加減にしなさいっ！二人とも別々にしてあげればいいですよっ！」

「では零二君、明日膝枕して差し上げますわ」

「主様私は次の休みを頂いた日に」

リアス部長が一喝してこの場は収まった。グレイフィアが俺に「主様」と言ったことは有耶無耶になった。しかし、最近の朱乃さんの俺に対する様子が段々過激になってきた。愛情は勿論感じるけど他に何か、言ってみればある種の依存を俺に対して感じる時がある。いずれどうにかしなくてはいけない問題だな。

小猫は我関せずって感じで部屋の墨で椅子に静かに座っている。

部室のドアの外からイッセー達の気配がする。

やがて部室に入ってきた3人はグレイフィアを見て反応を示している。

木場は顔を強張らして挨拶をしていて、アーシアが誰だかわからないと言った表情をしている。

そんな中イッセーはグレイフィアの先ほどとは違ってクールな雰囲気グレイフィアを見て興奮している。メイド服を着ていることもより興奮する要因になっている。

こいつはアーシアと良い雰囲気なのに他の女性に興味を示すとは、しかもアーシアがいる前で。夢がハーレム王とか言っているから目移りしてしまうのだからうけど、まずはアーシアを見るよ。それにグレイフィアは俺のものだ。

グレイフィアに目が言っていたイッセーのお腹をアーシアが抓って正気に戻らせて部屋を見たイッセーがリアス部長に膝枕してもらっている俺と目が合う。

「おい、レイっ！俺の部長に何羨ましい事になっているんだよ。俺と代われっ！」

今度はこつちかよ。それに俺の部長ってお前のもんでもないだろ。さっきので疲れた俺はリアス部長に視線を送る。

その視線を理解したリアス部長が話出す。

「イツセー達も椅子に座りなさい。この子は今日このままだから気にしないで頂戴。部活をする前に少し話があるから聞いて」

「お嬢様、私がお話しましょうか？」

リアス部長がグレイフィアに自分で話すと言った時、感じたことが無い気配がこの部屋に転移するのを感じる。

「実は」

リアス部長が話を続けようとした時部室の中央に見たこと無い紋様の魔方陣が光りだす。

「フェニックス家の紋章」

木場が呟いた。フェニックス家の者が何の用だ？このタイミングで来るって事はもしかして。

魔方陣から光が炎に代わり室内に熱気が包む。炎の中から男のシルエットの人物が腕を横に薙ぐと魔方陣の炎が下から上に消えていった。

現れた人物は赤いスーツを着た着崩している。スーツを着ているのにネクタイもせずにシャツのボタンを3つも開けている。

登場の過度の演出と現れたホスト崩れのヤンキーみたいなやつだな。俺はこいつがいけ好かない。

「愛しのリアス。会いに・・・何だお前？」

部室を見回してリアス部長を視界に収めて両手を広げてニコニコした表情のまま他の人間を無視して近寄り抱きつこうとした仕草のまま視線を下にした時俺と目が合い一気に不機嫌な声色で誰何してきた。

愛しのリアスか……。やはりこいつがそうなのだろう。しかし、こんなやつと婚約させるなんてグレモリー家はお里が知れるな、家柄と血筋だけで決めるとは。

そんな事をフェニックス家の者を観察しながら思っていたら。

「お前誰の許しを得て俺のリアスに触れている。下等な人間風情が」

ホスト崩れだと思ったたらチンピラだったか。まあ、どちらでもかまわない。この婚約はリアス部長を不幸にする。今回の婚約は破棄させよう。俺の全てを賭けてでも。

「この子の事は貴方には関係ないわ。それより何しに来たのよ、ライザー？」

リアス部長は普段聞いたことも無い冷たい声で問いかける。

「早速だが、式の会場の見学に行こう。日取りも決まっているんだからな」

そう言いながら今度こそ部長に近づき部長の腕を掴もうとした時俺は奴の腕を振り払った。

「触るなよ」

「貴様っ！さっきはリアスに免じてやったのにつ。よほど死にたいらしいな、下等生物がっ…」

激昂しながら此方を見てくる。その程度の威圧でどうにかなると思っっているのか。

「そうだった！レイの言う通りだ。部長は俺の部長だッ！それにあんた誰だよ」

突然話に割って入ってきたイツセーに毒気を抜かれたのか先ほどまでの威圧が無くなる。それにまだ「俺の部長」って言うか、しつこいな。

「リアス、俺達の事下僕に言ってないわけ？それに俺の事知らないのかよ。転生者にしてたってよ」

「話す必要が無いから話していかないだけよ」

「ふふふ、そう照れるなよ」

何か変な勘違いをし始めた。リアス部長が本当に嫌がっているのを照れているものだと思っている。

「お嬢様の眷属の皆様」

そこでグレイフィアが説明をした。その説明によると名前はライザー・フェニックス。純血の上級悪魔であり古い家柄のフェニックス家の三男坊だと。

そして、リアス部長の婚約者であり次期グレモリー家当主の婿殿だっ。グレモリー家は次代で終わらせたいらしいな。

説明を聞いたイツサーが絶叫しながら「俺の部長がー」とか言いながら落ち込んでいた。

もう何も言うまい。

朱乃さんが奴にお茶を出し、次にリアス部長に出した後俺達にもお茶を淹れてくれた。一応奴にもお客様扱いするらしい。しかし、奴がお茶を飲んで褒めても嬉しそうではなく、俺達に向ける笑顔ではなく事務的な笑顔で返事をしている。

俺は相変わらず、部長の膝の上に頭を乗せている。リアス部長は奴をお客様扱いはしないらしい。でなければ俺をとっくに退かしているしな。

リアス部長と俺で椅子を一脚占領しているから奴はリアス部長の向かいに腰を掛けて話し合っている。

話の内容はリアス部長が結婚はしないと言い出したら奴が先の大戦で戦死し御家が断絶したことがあり上級悪魔の数が減っている。そこで上級悪魔同士の新生児の貴重さを説いている。

それに『七十二柱』と称された悪魔の半数も残っておらず、この縁談に未来が掛かっているんだと。

反吐が出る話だな。そんな話が出るような悪魔情勢とでも言えばいいのかそんな社会であるらしい。何時の時代も情勢も勢力とか言って個人を無視する風潮だな。

それでも結婚しないとリアス部長。すると奴は。

「フェニックス家の看板を背負った悪魔なんだよ。この看板に泥をつけるわけには行かない。俺は人間界にも来たくなかったし好きでもない。この世界の炎と風は汚い。炎と風を司る悪魔としては、耐え難いんだよー!」

何かいきなりかつこつけて言った後燃え出した。

「俺はお前の下僕全部を燃やし尽くしてでも冥界に連れ帰るぞ」

燃え出したと思ったたら脅してきた。最初からそう言えばいいものを登場シーンから一々変な演出を入れる奴だな。何がしたいのかわからなかったよ。

その上部屋全体に殺意と敵意が充満する。俺とグレイフィア以外は奴のプレッシャーに飲まれたり、臨戦態勢に入っている者もいる。まったく仕方ない。

「やっさとその蚊に刺された様に感じるプレッシャーを抑えろよ」

俺がそういいながら奴のプレッシャーを相殺する。

「何っ!」

まさか先ほどからバカにしていた俺にプレッシャーを撥ね退けられたのが意外だったのか驚いた表情でこちらを見ている。

「フェニックス家の事は聞いたことがある。結構な財を成している」と

「ふふふ。こんな人間にも知られているか。我が家は」

俺が褒めたと勘違いして悦に入りだした。救えない奴め。

「ああ、先ほどフェニックス家の看板といったが誰でも知っているぞ。冥界でチェーン展開している『焼き鳥屋ふえにつくす』ってな。くっくっくっ」

「貴様っ!!!我がフェニックス家を愚弄するきかっ!」

「愚弄だと。先に喧嘩を売ってきたのはお前だぞ。先ほど『俺はお前の下僕全部を燃やし尽くしてでも冥界に連れ帰るぞ』って言ったな。そんなことはさせないぞ。それにお前を殺しこの婚約を破棄させる」

「お前みたいな所詮人間でしかない奴がフェニックスである俺を如何にこつできるとは思えんな」

「ふん喧嘩上等だよ、焼き鳥野郎。死んであの世で後悔しろっ!!! 破道の」

俺の普段消している霊力を開放し高めつつ鬼道を放とうとした時グレイフィアが介入してきた。

「お二人ともこれ以上やるなら私も黙ってみている訳にも参りません。それに我々眷属が黙っておりますよ」

グレイフィアが言葉に迫力を乗せ発するとライザーは表情を強張らせた。ふん、グレイフィア程度で臆するとは、焼き鳥じゃなくてチキン野郎だったな。

それにしても先ほどの言葉。前半は俺にも言っている様だったけど、後半はライザーを一方的に言っているようだ。俺に喧嘩を売ったって事はこの場にいる俺の眷属にも喧嘩を売ったことになるのだから。グレイフィアの中では。

「最強の『女王』と称されるあなたにそう言われ、眷属までは敵に回したくないからね。化物揃いで有名なサーゼクス様の眷属とはね」

チキン野郎がそう言い戦意を落としていく。
それを確認してグレイフィアが再び口を開く。

「この話し合いの場が最後でした。グレモリー家とフェニックス家の方々も話し合いが決裂する事は重々承知でした。そうなった場合に最終手段を取り入れることとしました」

「最終手段？」

「お嬢様がご自身の意思を押し通すし、この話が決裂で終わった場合はレーティングゲームにて決着を付ける事となります」

レーティングゲームと聞き知っている者はグレイフィアと俺とライザー以外が言葉を失い、知らない者ははてなを浮かばせている。木場がイッセーとアジアにレーティングゲームの説明をしている。

グレイフィアとリアス部長が話を進めて最終的にゲームを行うことを了承した。

そこにチキン野郎が自分は経験者だとか勝ち星が多いとか自慢している。そして。

「まさかここにいる面子が君の下僕か？」

「レイ以外が私の眷属よ。それがどうしたのよ？」

「お前の女王以外俺のかわいい下僕に対抗できないんじゃないか？ そんな弱そうなのばかりで。ぶっぶっぶっ」

そついいチキン野郎が指をパチンと鳴らすと部室の魔方陣が光ります。チキン野郎の紋様が浮かび出す。十中八九眷族を呼んだんだろう。それにしてもこのチキン野郎ナルシストか？ 一つ一つの行動がもはや鬱陶しい。

呼び出した後自慢し始めた。色々なジャンルの女性陣だな。まだ

小さい子もいれば大人な女性もいる。チキン野郎の趣味全開って感じの面子だ。全部で15人いる。

眷族を見たイツセーが血の涙を見てチキン野郎を睨めているが、自分のなろうとしてしている事の体現者を見ているような一種の尊敬した様な視線でも見ている。

リアス部長にイツセーの行動を問うと眷属の一人とディープリキスした。

婚約者の前で次々としていく。気色の悪い盛ったチキン野郎だ。リアス部長はこの婚約をする気は全然無いし何とも思っていないだろうけど、常識を逸した行動だなこれは。

チキン野郎はイツセーを挑発した。イツセーは神器を出し殴りかかるが出したばかりでは倍化していない状態で殴ってもしょうがないでしょうが。案の定杖術使いの小猫くらい小さい女の子にやられている。どうやら一番弱い子にやられた様だ。

その後十日後にレーティングゲームをやるからといいお情けを掛けているつもりらしい。そして。

「その人間。お前もリアスの陣営として今回のゲームに参加しろ。お前は俺が直々に殺してやる」

「上等だ、チキン野郎。お前を壊してやるよ」

ヤクザ見たいな台詞を残して眷族と共に魔法陣の光の中へ消えて行った。

最後まで気にくわないチキン野郎だ。